



扉

雑誌名	東西南北
巻	2007
ページ	4-5
発行年	2007-03-15
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00002421/

ジェンダーの視点で 読み解く^{いま}現在

以下の3点の論文は、2006年6月28日（水）に、和光大学総合文化研究所とジェンダーフリースペースの共催で実施したシンポジウムを基に書かれたものである。開催にあたって示したシンポジウムの趣旨は以下の通りであった。

1970年代以来、近代社会の行き詰まり状況が浮きあがる中で、社会のあり方をジェンダーの視点で見直し、平等・開発・平和の達成をめざす運動が、国連・各国政府と草の根NGOとの連携を通じて、途上国を含む世界各地で進展してきました。しかし一方、今世紀に入って、特に9・11以後、国家の名による暴力の行使である戦争の脅威が跡を絶ちません。日本でも、憲法ならびに教育基本法の改正論議、靖国参拝問題等、戦後社会の基本原則である平和や人権の思想、さらに戦争の評価について、根本的に再検討しようとの動きが加速しています。「ジェンダーフリー」どころか、「男女共同参画」政策をも否定しかねない、バックラッシュ（歴史のやり戻し）の動きも強くなっています。

こうした動きがどのようにつながっているのでしょうか。このシンポジウムでは、国家暴力である戦争や社会・家庭内での「力による支配」の問題を、ジェンダーの視点で読み解いていきます。それを通じて、個人の尊厳の確立、平和で安全な社会の建設についてともに考えるための機会にしたいと思います（「シンポジウム開催の趣旨」より）。

若桑みどり・船橋邦子・山下英愛のお三方に講演をお願いし、まず、若桑さんには、男らしさ・女らしさというジェンダー・ステレオタイプが世論操作に典型的な形で動員される場である、戦争映画における表象分析をお願いした。当日若桑さんは、アジア太平洋戦争期に始まり、今年話題になった『男たちの大和』に至るまでの、戦争映画の貴重な映像を持参して、映像をまじえてお話しくださった。

次に、船橋邦子さんに、戦争表象の背景にある日本の「ジェンダー平等政策とバックラッシュ」についてお話ししていただき、続いて山下英愛さんに、「韓国社会とジェンダー」についてのお話をいただいた。韓国は、植民地時代の苦い歴史を持ちつつも、民主化運動等を通じて、特に1990年代以降、女性学と女性運動、女性政策を着実に発展させてきた。日本の最近のバックラッシュの状況を問い直し、今後の方向を探るための手がかりとして、韓国の状況は参考になると思われる。

当日は、時間的制約のため、3人の講師の方々のお話も短縮し、また討論の時間も十分にとることができなかった。本誌では、各講師に自説を十分展開していただくために、新たに原稿を書き下ろしていただいた。これらの論文が、ジェンダーの視点に立って、日本とアジアの今後を考える諸議論の呼び水となることを期待したい。

シンポジウム・コーディネーター：井上輝子（所員／人間関係学部教授）



